

## 式辞

年明けから数十年に一度と言われる厳しい寒さと大雪をもたらした冬将軍がようやく去り、いよいよ草木が芽吹く弥生の時を迎えました。

以前に比べれば大幅に制限が緩和されたとは言え、まだまだコロナウイルス感染症との戦いが続いているため、規模を縮小した形にはなりますが、本日ここに、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校第74回卒業式を挙行できますこと、皆様と共に喜びたいと思います。

122名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本校関係者一同は、これまでに皆さんが尽くされた努力と研鑽を心から讃えます。

また、今日まで、長きにわたりお子様の修学を支え、励ましてこられたご家庭の皆様に対しましても、深く敬意を表します。

本校は、令和元年度から今月までの4年間、文部科学省からWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業拠点校の指定を受け「地球サイズの教育」を実践してまいりました。大学に進学する際に必要とされる学力を身に付けることはもちろん、意欲的に学習や研究を遂行することができる力の育成、さらに加えて豊かな人間性を育む全人教育に取り組み続けています。「学びの中で遊び、生徒が生徒を育てる学校」を目標に掲げ、これからも地球サイズの教育実践を続けてまいります。

グローバルかつイノベーティブな人材を育てることをめざす本校の伝統的な校風は「自主自律」です。この校風は、「昭和の松下村塾」を標榜し設立された、本校創設時から大切に守り継がれています。この校風の下、皆さんの先輩は、さまざまなことに自主的に取り組み、社会に貢献できる行動力を身に付けるとともに、自らの行動に責任を持ち、自分がすべきことを誠実に果たそうとする精神力を身に付けてこの学び舎を巣立たれました。自分で自分を律することができるプライドをもつことが本校卒業生の証です。本日卒業される皆さんにも間違いなくこの精神が身につけていると確信しています。

私は皆さんと同じ令和2年4月に本校に籍を置きました。入学式直後から、皆さんの学校生活に大幅な制限をかけざるを得ない状況が続きました。我慢を強いられ、楽しさよりも辛さが勝る高校生活だったかもしれません。そのような中であっても、高校総体や総文の応援に駆け付けた時、温かい雰囲気迎え入れてくれた心遣いとさわやかな笑顔、進路選択の時期に、入りづらいであろう校長室に足を運び悩みを打ち明けてくれた時の真剣な眼差しなど、皆さんと共に過ごした時間を私は決して忘れません。

折に触れ、皆さんには「限界を感じるがあっても、それは今のやり方での限界であり、必ず別のやり方がある」ということを伝えてきました。これからの人生では、今までに出会ったことのない困難に出くわし限界を感じる事が度々あると予想されます。そのような時は、本校のことを思い出してください。本校は、1学年3クラスの小さな学校です。それゆえ、その関係性は濃密です。各地区の同窓会に参加すると先輩方の多くが、「附属高校で

の出会いが、今の自分を支えている」と口にされます。本校で結ばれた絆は、一生の宝です。同級生に限らず、9千名を超える先輩方、そしてこれから続いてくる後輩とのつながりは間違いなく大きな財産です。その財産を生かし人生の荒波を乗り越え未来を切り拓いていってください。

「学びて去らばふり顧れ」校歌の一節です。どうぞ、本校を卒業したことに誇りをもち、日本を牽引し、世界に羽ばたくグローバルな人材になってください。そして時には、翼を休めに母校に顔を出してください。いつでも大歓迎します。

結びに、卒業生の皆さんの前途に幸多からんことを祈念して式辞といたします。

令和5年3月3日

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

校長 中澤宏一